



立教セカンドステージ大学

# News Letter mini

Vol. 3

お問い合わせ

Aug 2020

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

## 修了論文に向けて

RSSC 教員  
立教大学名誉教授 野田 研一



「修了論文」は立教セカンドステージ大学における学びの集大成です。例年、私のゼミナールでは、春学期はテーマとタイトルの確定に時間を割きます。そして秋学期には、50%論文（9月下旬）、80%論文（11月中旬）、そして仕上げ（12月下旬）という3段階で提出に向かいます。手はじめはテーマとタイトルです。テーマは、具体的な対象（例：オリンピック、暴走族）を分析する場合と、抽象的なコンセプトやアイデア（例：個人と集団、空間）を解明する場合があります。

そして、タイトル。これは論文の究極の要旨です。次に、アイデア、概念図、目次、主張したい見解や論理、あるいは論文の一部などをノートします。書けそうなところから書き進めましょう。断片的であっても大丈夫。あえて序論や結論を先に書いてみるのも効果的です。（これは論文の全体像を把握するのに役立ちます。）書きながら考え、書きながら調べます。そして論文のもっとも大きな推進力は人に話し、その上で書くことです。そうすると論点が整理され、ストーリーが自然に生まれるはずですよ。

## RSSCの一年 キャンパスで迎える学びの夏

8月上旬から9月中旬にかけて開講する**夏期集中講義**は、それぞれ3日間連続(10時～17時)で行われます。

3日間連続の開講日程を活かし、春学期や秋学期のように90分毎に区切られた講義では実現しにくい、フィールドワークや実習、グループワークやディスカッションなどのプログラムが組み込まれた講義が多いのが特徴です。

フィールドワークを実施している科目の一つに「環境保全とコミュニティ形成(2020年度は秋期集中講義)」があります。2日かけて落合川(東久留米市)、狭山丘陵(所沢・入間市)を巡り、



里山観察の様子



自由学園明日館見学

「里川・里山の自然再生とコミュニティ」のテーマで社会と生態の情報の洗い出し作業や、現場でのヒアリングなど質的フィールドワークを実施し、最終日に講義とワークショップでまとめを行います。

また、「歴史の中の学校教育」では、教育を歴史的に考察する見方や考え方を学ぶ中で、実際に講義の中で取り上げられる自由学園の施設見学に行きます。このように、どの科目も1日の大半の時間を共に過ごすので、教員や同じ授業を選択した受講生との距離も自然と近くなるようです。

夏期集中講義ならではの魅力あるカリキュラムで、興味のある科目を連続した日程で受講を希望される方もいますが、真夏の暑さを考慮して、自身の身体に無理のないように受講スケジュールを組むのがおすすめです。

※授業や各種活動は、感染予防策を講じた安全な形での実施を検討しています。

次回は、「受講生委員会活動」紹介を予定しています。

## RSSC事務室から、キャンパス便り

今回は、立教大学のオンライン授業についてです。

立教大学では、2020年度春学期の授業は全てオンラインで実施しています。利用しているオンライン会議システムは、Google MeetとZoomです。皆さんも使ったことがあるかもしれませんが、「画面共有」(授業資料提示)、「ブレイクアウトセッション」(グループディスカッション)などの機能があり、必要に応じてそれらを活用しながら授業が行われています。教員と学生には、立教大学のアカウントが付与され、オンライン授業にはそのアカウントを使って参加します。

## 池袋とキャンパスの歴史 100年前はのどかな麦畑

立教大学は、1874年アメリカ聖公会の宣教師ウィリアムズ主教によって東京の築地に開かれた英学と聖書を教える小さな私塾「立教学校」がルーツです。1918年に創立の地・築地から池袋へとキャンパスを移し、今年で創立146周年を迎えます。大学内の多くの建物が東京都の歴史的建造物に選定されています。

移転当時、キャンパス周辺は一面の麦畑でした。富士山も望める静かな池袋の地に感動した本学のタッカー主教は、「素晴らしい絵画のよう」と絶賛。その風景は時代とともに変化していましたが、麦畑の中に野花「ムラサキ」が咲き誇る様子は、校歌の「紫匂える武蔵野原」という歌詞に刻まれ、美しい情景を今に伝えています。



移転当時の本館(中央)  
チャペル(右)、図書館(左)

## 死から生を考える RSSC教員 小谷 みどり



私の専門分野は死生学です。あまり聞きなれない学問かもしれませんが、死や生について宗教学、哲学、民俗学、社会学、医学、法学などさまざまな視点からアプローチします。ここ数年、終活という言葉が広まり、自分のお葬式やお墓についてあらかじめ考えておこうという人たちも増えています。昨年12月、厚生労働省が提唱する「人生会議」のポスターが話題となりました。人生会議とは、死を迎えるにあたって自分が望む医療やケアについて前もって考え、家族や医療者たちと共有する取り組みのことです。しかし90年代までは、こんなことは家族が考える問題で、「本人が生前に考えるなんてとんでもない」という風潮がありました。

2000年以降は、家族葬や火葬のみですませる直葬が増えていますし、あちこちの自治体では無縁墓の増加、引き取られない遺骨の増加に頭を悩ましています。この背景には、死亡年齢の高齢化、核家族化、人口の流動化など、社会の変化が大きな影響を与えています。

2年前に亡くなった女性のうち、75.3%は80歳以上、90歳を超えていた人は39.3%もいます。80歳以上で亡くなった男性では、2000年には33.4%しかいませんでしたが、2018年には53.6%と過半数を占めています。つまり、これからの社会は、「老いては子に従え」ではなく、「老いたときには子どももよぼよぼだ」ということです。「自立できなくなっても子どもがいるから安心」ではない、ということです。三世同居が急速に減少し、いまや、祖父母は孫にとっては家族でなく、親戚です。住んだことのない土地にある「親戚」のお墓を、死後何十年もお参りし続けるはずがないのです。ここ20年だけを切り取ってみても、社会は大きく変化しています。

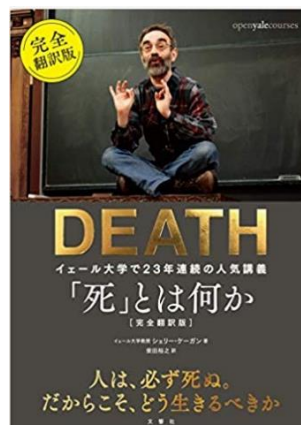
ところが、私たちの意識はなかなか変わりません。家族全体が高齢化しているのに、「老後は家族がいるから安心」と幻想を抱いている人は少なくありません。一方で、「家族に迷惑をかけたくない」という意識もあるでしょう。しかし、手間がかかることが迷惑かどうかは人間関係によります。手間を迷惑と思わせない関係性を築くことが先決なのです。

新型コロナウイルスで、周りの人と何のお別れもできず亡くなっていく人たちの姿から、私たちは、明日があるとは限らないという事実を再認識しました。「そのうち」「いつか」と先送りするのではなく、今をどう生きるかが問われているのです。今を精いっぱい生きるためには、将来の不安を軽減、解消することが大切です。

前述した人生会議は、アドバンスケアプランニング（ACP）というアメリカから導入された取り組みです。そのアメリカでは、治療を拒否する権利や、家族には病状を知らせない権利が患者に保証されています。どんな最期を迎えたいかは人それぞれであっていいと思います。正解がないからこそ、みんなが元気なうちに考えておかねばならないのではないのでしょうか。



RSSCでの講義の様子 科目名「最後まで自分らしく」  
ゲストスピーカーに納棺士 木村光希氏を迎えて



### <推薦図書>

Shelly Kagan 著『DEATH』  
2019年 柴田裕之訳 文響社  
哲学的思考に触れたい方におすすめです。

### <教員専門分野>

死生学、生活設計論、余暇論